



開会の挨拶

細田 満和子
(星槎大学／東京大学)

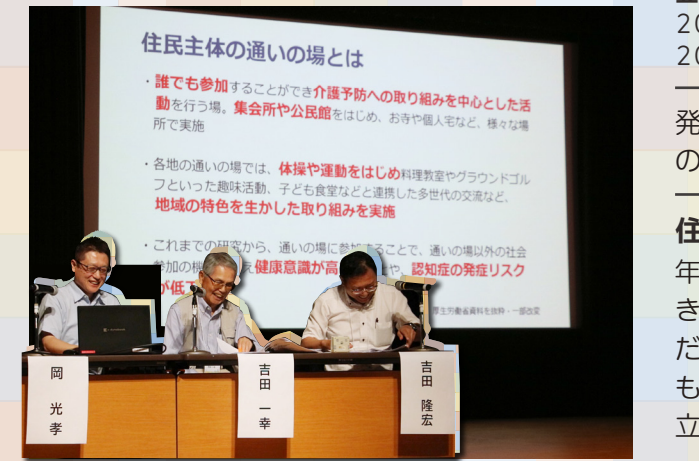
脳損傷後の人生には多くの困難が伴いますが、その歩みを支えるために、ケアリングの実践と知恵を深め合うことが、私たちの使命です。本大会が、参加されるすべての方々にとって、新たな気づきと連携のきっかけとなり、それぞれの現場に希望の灯を持ち帰っていただける機会となることを願ってやみません。

大会長挨拶

岡本 隆嗣
(医療法人社団朋和会 西広島リハビリテーション病院 病院長)

突然の病気やけがで前向きになれなくなった多くの方を診てきました。身体や脳、心の回復にはそれぞれに必要な時間があります。家族、友人、地域コミュニティの人々、ピアサポーターなどと一緒に協力しながら、ご本人が再び前を向いて歩むことを支援していく姿勢が大事なのではないのでしょうか。こうした背景から、本学会のテーマを「ともに歩み、明日を拓く」としました。より良い地域社会の実現を目指して努力したいと思います。

シンポジウム① 地域のため 自分や周りの方のため 住民主体の通いの場を盛り上げよう！



大会報告

2025年6月21日(土)・22日(日) 安芸区民文化センターで、西広島リハビリテーション病院が運営事務局となり「第14回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会 広島大会」を開催しました。今回の大会では'ともに歩み あすを拓く'をテーマに掲げ、多くの方にご参加いただきました。温かな交流や意見交換が生まれ、盛会のうちに無事終了しました。ご参加いただいた皆様、ご登壇くださった皆様、開催にご協力いただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。

第13回東京大会報告

中村 千穂
(高次脳機能障害の子どもを持つ家族の会 ハイリハキッズ 代表)

2024年7月6・7日に、第13回日本脳損傷者ケアリングコミュニティ学会東京大会を開催し、186名の方にご参加いただきました。大会のタイトルは「いっしょに考えて、わたしが決める ～やってみよう協働意思決定 Let's try Shared Decision Making!～」皆さまが今後も'協働意思決定'を行い、自分らしく周囲の方々とつながっていかれますよう心から願っております。

教育講演 共生社会を実現するには障害のある人との実践が必須

長谷川 幹
(世田谷公園前クリニック 名誉院長)

一般的に、医療、福祉職は支援をする側、障害のある人は支援を受ける側、即ち暗黙の裡に「支え手」と「受け手」に固定している。そして、支援の「受け手」でありながら「支え手」になれる人を少なからず見ている。障害のある人とさまざまな実践を通じて交流することにより気持ちが通じて、ともに行動することにより「共に生きる」ことにつながる。その意味では実践が必須である。

司会 岡 光孝 (西広島リハビリテーション病院 作業療法士)
登壇者 吉田 隆宏 (居宅介護センターとも ケアマネジャー)
登壇者 吉田 一幸 (当事者)
2007年(66歳の時)に脳梗塞・右片麻痺を発症し約4か月入院。2018年にご自身が中心となり通いの場を立ち上げました

発症後、地域の「通いの場」の立ち上げから現在の運営までを、ご自身の体験などを交えて発表されました。

住民主体の通いの場とは(厚生労働省の資料を抜粋・一部改変)
年齢や心身の状態に関わらず、分け隔てなく誰でも参加することができ、介護予防への取り組みを中心とした活動を行う場です。介護予防だけでなく、社会参加や地域の助け合いなど地域の力を高める拠点でもあります。また、高齢者が時には担い手となり、時には支えられる立場となりながらも活躍できる場です。

シンポジウム② 日々の生活を語る ～失語症を持つ人～



委員会報告

主体性研究委員会
ツール研究委員会
当事者社会参加推進委員会
動画作成委員会
広報委員会

能智 正博
小林 央
長谷川 幸子
細田 満和子
中島 鈴美

作品展示



座長 濱本 康弘 (当事者)
2018年8月に脳出血で、右片麻痺(上肢・下肢)と失語症になる。2019年5月から仕事に復帰。

登壇者 青木 秀訓 (当事者)
2019年7月心原性脳塞栓症で失語症になる。発症の5年前に会社を辞めて家業継いだ。発症後は家業を休業し、元の会社に復職。

登壇者 滝口 政宏 (当事者)
2017年12月脳出血で発症。右片麻痺(上肢・下肢)と失語症になる。就労継続支援A型事業所に通っている。

登壇者 井上 珠美 (当事者)
2012年5月脳梗塞で発症。右片麻痺(上肢・下肢)と失語症になる。

失語症や片麻痺のある方々が、失語症者向け意思疎通支援者と共に登壇されました。復職や夢の継続、生きがいの再発見など、それぞれの経験などを発表されました。

失語症者向け意思疎通支援者とは
2018年度に障害者総合支援法の地域生活支援事業に位置づけられました。意思疎通支援者は国のカリキュラムに基づき、都道府県が各言語聴覚士会に委託して養成し、失語症者への派遣が行われます。派遣先は、当事者同士の会話支援、医療機関同行、役所での手続き、契約支援など多岐にわたります。

ピアノ演奏

山口 公美子 (当事者)

2007年に脳幹海綿状血管腫を発症、右半身に運動障害と感覚麻痺になる。麻痺のない左手だけでさまざまな曲を演奏され、会場からは演奏に合せて手拍子が起こりました。

広島大会1日目
司会 日下昭雄 (当事者)

スーパーに30年勤務後、飲食店を営む。2006年に脳梗塞を発症。現在は、通所・訪問リハビリを継続。カープのユニフォーム姿で、明るく司会をしてくださいました。

懇親会

学会初日の夜は、懇親会を行いました。立場や地域を越えた交流が生まれ、和やかな雰囲気の中で意見交換や情報共有が行われました。

広島大会の抄録はQRコードからご覧いただけます▶



私にとっての料理～体験談～

登壇者 采野 芳美津

脳卒中を発症後、右片麻痺と失語症になる。一時は調味料の名前と味が一致しなくなり、料理を中断した。発症から4年後、突然レシピがなくても料理ができるようになった。買い物は電動車いすを利用し、左手一本で家族の食事を作っている。目標は「家族以外の人にも自分の料理をふるまう」こと。

もう一度、フェアウェイへ
—脳梗塞から“100切り”への挑戦
～雲外に蒼天あり～

登壇者 丸尾 忍

脳梗塞を発症後、左半身麻痺となる。一時は日常生活も困難となったが、何としても立って歩きたい、もう一度ゴルフがしたい思いが強くなり、リハビリや棒で素振りの練習に励む。今では社会復帰し、ゴルフもラウンド出来るようになり、右手のみでクラブを握り、スコア 100 を切るまでに回復。2021年春からはゴルフスクールへ再入会した。

高次脳機能障害にまつわるマイクロアグレッションの文献検討～無意識の偏見と向き合うケアリング・コミュニティのために～

登壇者 大下 琢也

無意識の偏見に基づく悪意のない声かけは、マイクロアグレッション（以下、MA）として理解されている。他者が当事者の困難を「よくあること」と声掛けすると、当事者は障害経験の軽視、無価値化と否定的に受け取っていた。MA の具体例を知ることは、当事者の経験を尊重し、ケアリング・コミュニティとして無意識の偏見に向き合う一助となると考えられる。

ピアサポートの価値創造と普及による新しい医療社会モデル構築にむけた展開

登壇者 西條 寧音

ピアサポートは、当事者同士の相互扶助を通じて孤立緩和やセルフケア促進を図る仕組みであるが、日本では十分に普及していない。テクノロジーを活用したピアサポートモデルとして、帯広で当事者と地域住民が交流し地域課題を抽出する「ソーシャルバザール」、福岡で当事者が学生に経験を伝える「WithUs」プロジェクト、そしてAIを用いて“こえ”の分析を行う「こえを“かち”にするプロジェクト」の3シナリオを構築。当事者団体と共に全国への他地域展開（十勝帯広地域、福岡博多地域、福岡北九州地域他）を進めている。

乗馬との出会いと取り組みの報告

登壇者 三浦 伸吾

脳出血を発症後、右片麻痺と失語症になる。2008 年テレビ番組をきっかけに乗馬施設を訪問。未経験だったが、施設の配慮のおかげで始められた。2010 年車の運転を再開。2015 年パラレイングに挑戦。障がいがあっても好きなことに挑戦すると人生が豊かになる。

高次脳機能障害者自助グループ活動の意義と効果～出雲 縁 ing (えにしんぐ) トークの会の立ち上げから今日まで～

登壇者 祝部 英明・黒目 裕策

当会は、当事者同士が交流し、共感を育みながら支え合い、安心や安らぎを得られる場所である。グループでの活動は、障害の有無に関わらず対等に生き、ともに価値を創り上げる「共生」から「共創」へ向かう第一歩でもある。本会は、障害があっても自分らしく生きるための大切な「止まり木（羽を休め、翔び立つための足場）」なのである。

地域密着型通所介護から広がるケアリング・コミュニティ～"イケオジ"の極意～

登壇者 山岸 麻野

事業所で制作した作品を近隣店舗で無人販売する企画を通じて、利用者と地域との絆が育まれた。お洒落で親分肌の70代男性利用者（2011 年脳出血を発症、左片麻痺、高次脳機能障害）は、車いすで店舗を訪れ、営業の役割を牽引。ファッション誌を参考に新作提案も行う。個人の生きがいだけでなく、ケアリング・コミュニティを醸成する一助になっていると考える。

デンマークにおける脳損傷者のピアサポートとアドボカシー活動
-デンマーク脳損傷者協会を訪ねて-

登壇者 細田 満和子・長谷川 志帆

デンマーク脳損傷協会は、脳損傷者の患者会で 5000 世帯がメンバーになっている。同じ建物内のデンマーク脳損傷センターと相互に連絡を取り合い、脳損傷者のリハビリと生活の質向上を実現している。下部組織の若者たちの集まり「若い脳」は、本協会が脳損傷の社会的認知度向上や予算を得るためのアドボカシー活動、20代から40代の方々の活動(Discord というアプリを使ってコミュニケーションをとったり、ホームページを新しくしたり、キャンプを企画)等をしている。これらは日本への示唆も豊富な重要な事例といえる。

ワークショップ①
福祉ネイル

登壇者 槇本 千恵子・渡辺 泉



福祉ネイルとは、高齢者や病気・障がいを抱える方々に向けたネイルサービスで、マニキュアのカラーリングやハンドトリートメントなどを楽しんでいただく。会話を重ね、心が和らぎ、自然と笑顔が生まれている。実際にネイルをしてもらった参加者からは笑顔が溢れていました。

シンポジウム③
高次脳機能障害について一病識の観点から

健康な人の生活に近づく工夫

- お金は大事
 - 「見える化」して管理
 - 各種割引制度の活用（知っておく）
 - 節約
- この瞬間をどう生きるか（体調変動に立ち向かう）
 - 「自利利他」の心構え
 - 優先順位をつける（今はしない覚悟）
 - 周到な準備と体力作り

【自利利他】
自分の利益と他人の利益を同時に追求
すること
自分が幸せになると同時に相手を幸せにすること

澤田 梢

近藤 啓太

守下 潤子

安井 傑

村重 征城

次回大会長挨拶

今回は、2026 年東京で開催！（詳細が決定次第、学会ホームページに掲載予定）

広島大会2日目

司会 中本 千鵬（当事者）

小学生の時に脳出血を発症。左片麻痺になる。現在、社会人としてシステムエンジニアをしている。閉会のあいさつでは、会場の参加者に語りかけるような温かい言葉で締めくっていただきました。

ワークショップ②
木工

登壇者 岩谷 正人



1994年脳出血を発症、右片麻痺になる。得意だった工作をリハビリに取り入れ、木工を開始。孫のためのおもちゃ作りから始まり、ミニチュアハウスなどの複雑な作品も製作した。参加者が実際におもちゃに触れて遊んでみたり、仕掛けのあるおもちゃに不思議そうな表情で質問をしたりと楽しまれていました。

シンポジウム④
高次脳機能障害について一病識の観点から

健康な人の生活に近づく工夫

- お金は大事
 - 「見える化」して管理
 - 各種割引制度の活用（知っておく）
 - 節約
- この瞬間をどう生きるか（体調変動に立ち向かう）
 - 「自利利他」の心構え
 - 優先順位をつける（今はしない覚悟）
 - 周到な準備と体力作り

【自利利他】
自分の利益と他人の利益を同時に追求
すること
自分が幸せになると同時に相手を幸せにすること

澤田 梢

近藤 啓太

守下 潤子

安井 傑

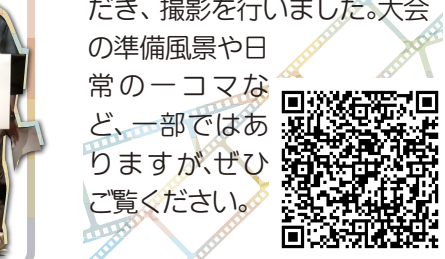
村重 征城

閉会の言葉

当事者の方達の力強さを感じました。主体的な言葉があちこちで出て、暖かな雰囲気漂っていました。更なる発展には、皆様に会員になっていただくと共に、どのような活動を行っていくかを一緒に考え、一緒に活動を継続していただければ幸いです。

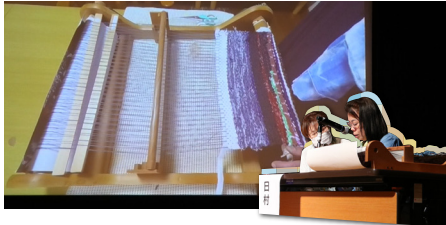
大会関連動画

登壇者の皆さまにご協力いただき、撮影を行いました。大会の準備風景や日常の一コマなど、一部ではありますが、ぜひご覧ください。



ワークショップ③
手織り

登壇者 日村 美雪



2009年脳梗塞を発症、右側片麻痺と失語症になる。知り合いから卓上手織り機をもらい、手織りの先生を紹介してもらう。先生の説明を録音し、何度も聞いて織り方を試行錯誤している。作品作りは、大体 1 ～ 6 ヶ月かかる。参加者は、卓上手織り機の工程の多さや複雑な作業を見たり、仕上がった作品に触れて温かみを感じたりしていました。

シンポジウム⑤
高次脳機能障害について一病識の観点から

健康な人の生活に近づく工夫

- お金は大事
 - 「見える化」して管理
 - 各種割引制度の活用（知っておく）
 - 節約
- この瞬間をどう生きるか（体調変動に立ち向かう）
 - 「自利利他」の心構え
 - 優先順位をつける（今はしない覚悟）
 - 周到な準備と体力作り

【自利利他】
自分の利益と他人の利益を同時に追求
すること
自分が幸せになると同時に相手を幸せにすること

澤田 梢

近藤 啓太

守下 潤子

安井 傑

村重 征城

閉会の言葉

当事者の方達の力強さを感じました。主体的な言葉があちこちで出て、暖かな雰囲気漂っていました。更なる発展には、皆様に会員になっていただくと共に、どのような活動を行っていくかを一緒に考え、一緒に活動を継続していただければ幸いです。

一般社団法人
日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会

一般社団法人 日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会は、脳損傷者、家族、市民、哲学者、社会学者、医療職、保健職、福祉職、行政職など暮らしにかかわるすべての人々が同じテーブルでさまざまな活動や体験について討議し、コミュニティにおいて実践し、共に生きていく社会づくりをめざしています。